

自家中毒症男児とその母親の 併行治療についての一研究

田 畑 洋 子・奥 田 須 佐 子

A Study on the Psycho-therapeutic Process with a Self-poisoning Child and his Mother

Hiroko TABATA and Susako OKUDA

目 的

子どもの問題の相談、治療では、その子どもが母親に連れられてくる以上、同時に母親の面接が不可欠の要素となってくる。母親に対して、単なる情報提供者として接するか、治療の積極的な協力者と見なしていくか、相談に来る方、受け入れる方双方の要因がからみ合い、個人治療とは違った困難さを感じる人が多いわけである。

小此木啓吾らは並行母親面接の在り方をとりあげ実践の結果を報告している。精神科医によって〈児童のための母親面接〉として始められた並行母親面接が、ケースワーカーによる〈母親のための母親面接〉へと移っていった過程を実際に起ってきた問題点をあげながら考察している。そこで最終的に求められたのは“児童治療からみればその手段である母親面接が、逆に母親の側からみれば母親の成長や自己実現の手段となり、児童治療もその一部となるような母親面接”⁽²⁾であった。そこで技法上の焦点となるのが“切り離し”(isolation)の解決である。すなわち“母親が子どもの困難を自分から切り離されたもの(無関係なもの)としてみようとする防衛的な態度を母親面接過程で解決し、母親自身が子どもの諸問題に母子間の交互作用を認めるようになること”⁽²⁾である。このような面接が進む中で、“母親として役割の再建と自信の回復の方向に統合していかなければならない。”⁽²⁾とする。当研究所においても、より有効な母親面接を目ざして、模索を重ねているわけであるが、本年度に行なった事例のうちから一例をとりあげ次に紹介したい。子どもの自家中毒のアフター・ケアという形で病院から紹介されて来所したのであるが、子どもの遊戯療法、母親のカウンセリングの結果、比較的短期間に問題解決がされた。しかも、母親面接が比較的明確に把握できる経過をとった。本報告ではカウンセリング、遊戯療法の経過を述べ、母親の面接過程の中で上記の“切り離しの解決”“母親の役割の確立”がどのようにされたかに焦点をあてて、考察を加える。

方 法

1. ケースの概要

(1) 主訴—自家中毒を治したい。受理面接時(5月4日)市大病院小児科に入院中。同病院より紹介されて来所。

(2) 家族構成

年齢は受理面接時。

(3) 生育歴

- ・出産時の異常，病気，習癖 | 特になし。
- ・離乳完了12カ月（母乳，不足分を補う。）
- ・歩行開始，12カ月。・発語，早めだった。

2. 受理面接の結果（5月4日）

祖父に抱かれ，母親，A主治医と共に来所。

子どもは祖父に抱かれたままセラピスト（奥

田，以下 Th と記す）と遊戯室へ，母親，主治医同室で面接，途中で祖父，子ども，Th が入室，祖父からも話をきく。最後に主治医とカウンセラー（田畑，以下 Co と記す）で打ち合わせる。次のことを明確にする。

(1) 問題の発生と経過

昨年9月（本児2歳10カ月時）妹誕生以来，目立って癇癪を起こすようになった。2月頃から時々，ウンチをもらしたり，赤ちゃんことばが出ていた。2月27日，ひどい熱（風邪）の時吐いたのがきっかけ。1週間程症状が続いたので入院。現在，1週間か10日に1度発作が起きて，点滴。その他は，遊戯室（病院内）に行ったり，元気になっている。「家に帰る。」と話しただけで発作が起きる。病院では母がずっとつき添っている。身体的問題は特になし。

(2) 診断仮説

①常に過剰な刺激がある中で育ち，その反面，ゆっくりと落ちついた母親とのつながりがもてていないのではないか。その為，子ども自身の強さ（1人でいられることを含めて）が出来ていない時に，妹の誕生という出来事が起こり，退行（regression）に結びついたと考えられる。

②大人ばかり4人の間で養育方針に違いがあったことが考えられる。受理面接時には，母親は自由にさせてもらっていると表現するが，嫁としての立場から気がねがあることが考えられる。母親の微妙な立場，気持を敏感な本児が感じとり，嘔吐という症状発生は，この表現としての拒否と考えられる。

(3) 治療方針

来談者中心療法による面接を行う。

子どもに対して一子ども自身に力をつけ（自分から動けるように）自己の感情を十分に表現できることを目指して，遊戯療法を行なう。奥田が担当。

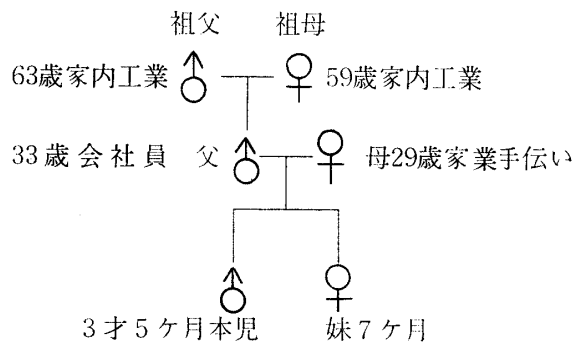
母親に対して一受理面接時は祖父も同席。又母親自身の中にも，今までのやり方を責められたくないという防衛があったようで本当の感情が出しきれていないと思われるので，時間をかけて話し合ってみる。抑えられた感情の解放，子どもに対しては養育上の責任を母親がとれるようになることを目指して，カウンセリングを行なう。田畑が担当。

3. 分析資料

- ・遊戯治療一面接終了後に遊戯内容，特徴，問題点，Th との関わり方等を記録。面接録音。
- ・カウンセリング一面接終了後，主な話題，面接印象，問題点等記入した記録，面接録音。

結 果

遊戯療法，カウンセリングの経過を各々，三期に分けて記述する。



1. 遊戯療法の経過

I期—第1回（5月2日）～第3回（5月16日）—一病院から退院後、身体の回復とともに徐々に遊戯室にも慣れ活発化していった時期である。

第2回（5月2日）—遊戯室への導入はCoと母親（以下Mと記す）の協力を得て、4人で入室する。子供（以下Chと記す）が自分から動き始めたので、CoとMが静かに遊戯室を出る。Mが退室しても平気な顔でThと遊び始めた。スムーズにThにとけこみ始めていると感じられた。体を動かす事のできる喜びも手伝ってか、部屋にあるものを手あたり次第にさわってゆく。これといって長続きする遊びはない。遊戯室に馴もうとしている様である。Thへの拒否感情は全くない。Thとして、Chが自由に動けるようになってきた所を尊重してゆきたいと考えた。

第2回（5月9日）—一回毎に元気を増してきている。Thとの交流で遊びを展開し決して1人遊びをしない。したがって、会話を大切にしている限りChを受容するよう心がけた。まずボウリングをやる。以前から知っていたらしく見つけて喜んだ。かけ声は「もう1つよ。」と女兒のようにかわいく言う。砂場に移ると、Thに「山を作って。」と言い、ミニ人形の女の子を持ってきて、「みんなみんな包んじゃってえ」とThにせがむ。ミニ動物に興味を持ち1つずつ取り出す。「にわとり変なお顔してる、ワニさん怖いよ。」と言って砂箱の中に置く。男の子を埋めて「あー助けたらんぞお、死んじゃえ。」と少々攻撃的に言う。声は大きくないが言葉が非常に鮮明である。次にワニについて「こわくない、おこる、ワニねえ、生きてるよ。」と言う。その他象や馬やカブト虫も持ってきて埋めたり立てたりした。砂場に移るとお鍋やおしゃも等を取り出し、砂場の縁に置き、キャベツやおいもや卵等食物を1つずつThに見せてどこに入れるか聞く。いっぱいになった鍋をThの前に差し出し「はい食べて。」と言う。またカレーライス、ジュース、ミルク等の言葉も飛び出した。最後は怪獣やウルトラマンを持ってきてバキューン、バキューン、と少々攻撃的にピストルで射ち殺した。お腹に溜った不満を発散させているかの様にも感ぜられた。終了時、ものわかりよくすぐに遊びをやめる。

第3回（5月16日）—砂場での遊びが多く、全体の声の調子は小さくかわいいが、時々思い切った、大きな声を出すようになった。ロボットを埋めたり出したり、山や海を作って欲しいとThにせがんだり、自分でも作ったりする。ピストルを握るとThと向きあい、射ち合う恰好をする。その時Thを見つめた目は、受理面接時にピストルの射ち合いをした時に「おもしろいな、この人わかってくれそうだな。」というような感じでThに興味を持ち始めた時の表情と同じであった。視線もよく合い、通じ合っているという感じのやりとりが続き、そのテンポも速い。その後怪獣やウルトラマンを持ち出してきては、それらを射ち倒したり、かなりきつく叩き倒したりする。自分の嫌いなもの、気に入らない人、いやな事をそれらに見たてて射ち殺す事により、仕返しをしている様な、自分の気持のもやもやをぶつけている様に感ぜられる。その他Thの動き、表情、外部の音、事物の移動に対して非常に敏感である。「負けないぞおー。」という言葉が印象的であった。Thに対して「椅子に坐って下さい」と言い、「はいどうも。」とThが答えるのを待って自分のを捜すというような、徐々にラポールが深まってゆくのを感じて、今日の面接を終えた。

II期—第4回（5月23日）～第6回（6月13日）—依存感情を受け入れられることによりThとのラポールを深めて、徐々に自分の中に強さをつけていった時期である。

第4回（5月23日）—半袖のセーターを着て走ってやってきた。毎回体力がついてきたよう

に思われる。遊びはままごと（お料理作り）と体を動かすことが主流になる。刀、ボウリング、バトミントン、すべり台など、絶えず Th を意識しての遊びであり、Th にこれでやれと
いって渡してやらせる場面が度々あった。「これ何?」「これどうする?」「どこに入れるの?」
という Th への問いかけが多いが、Th が「K君の好きなようにしていいのよ。」と言うと
「じゃあ、こっち。」と自分で決めてゆく。保育園へ行き始めた事、そこですべり台に乗った
事は大変嬉しかったらしく自分から口に出す。言葉使いも荒っぽく、力強くなってきた。「オ
レ」とか「負けないぞ」など、保育園の反映がみられた。Th が投げかける言葉もよく判って
いるようで、「もうおしまい。」と言うとすぐに部屋を飛び出しMの所へ行く。3歳の子どもに
しては少しききわけがよすぎる感じがあった。帰りは Th と Co に「またね、さようなら。」
と大きな声で言った。

第5回（6月13日）一言葉使いが荒くなって大きな声が出るようになった。絶えず Th を
意識して一人遊びをしない所は初回から続いている。子どもっぽいしぐさや声や話し方がある
反面、非常に大人っぽい話し方や理解力をみせる事がある。遊びはサンド・プレイとままごと
が主になる。サンド・プレイでは、何か心の中に溜っていたものをぶつけている様に、カブト
虫を砂箱に「死んじゃえ。」と言って激しく埋めたり痛めつける。埋めるのは何かいやな事が
“消えて欲しい、もう出てくるな”という気持ちの現われであろうか。埋めることを“包んじや
う”と言う。お料理作りでは、Th に対して「～してえ」という要求を多く出して先回の続き
をした。その他、ピストルをもって砂場で色々なおもちゃを攻撃した時、Th のことを初めて
（おまえ」と言い、Th に遊びの見本をみせたりした。全体を通して擬声音が増大したこと、
常に Th の顔がなくて怒ったりしたのは特徴的であった。

第6回（6月13日）一全体に声も大きく、動きが活発化して力がついてきた。車を競争させ
たり、トランポリンに乗ったり、ハーモニカもふいたりした。パチンコはどこに玉がはいると
いいかという事を大変よく理解しておもしろそうに長く遊んだ。パチンコの玉が机の下に落ち
て Th が拾おうとすると「おい、だいじょうぶか。」と声をかけられ、年に似合わぬ気づかい
に驚かされた。砂場に移ると、ままごとと道具をひっくり返してお料理作りを始める。「お肉、
ピーマン、玉ねぎ、きゅうり、かぼちゃ」と今までこわごわ1つずつ Th に聞いてから言っ
た食物の名前を自信をもって自分から口に出す。また、ませたり、つぶしたり等の料理方法も
たくさん出てきた。そして初めて、御飯にしたお鍋の砂を自分の口まで持っていき、食べる真
似をする。Th にも「全部食べて下さいね、ね、わかったあ」と念を押して食べさせる。「お
いしいか。」と聞くので Th が「おいしいよ。」と答えると「もっと食べてえいっばい食べて
え」と Th にせがむ。全体的に色々な事を思い切ってやってみた感があり、自分で決めて事
を進めてゆく力も出てきたように思われる。

Ⅲ期 第7回（7月11日）

3週間の休み後の面接であり、興味の範囲が増大し、絵本を読んだり、黒板に数字や図形を
かいたりして、色々な事物への理解の広がりが見られた。

遊戯室に入る時も今までにない元気さがあった。Th との関係でも、Th をリードして遊び
を展開する。Th に見ててといてトランポリンの上に、お父さん象、お母さん象、赤ちゃん
象を並べる。ピストルでイルカ、ひらめ、怪獣を射ち殺す。この時も Th が一瞬でも見てい
ないと怒り、自分のやるのを「見ろ。」と言う。「次はこれやる。」と言いながら、鉄琴、ラッ
パ、ハーモニカに触れてみる。砂場では、まずスコップを持って「おじさんがこうやってる
の、僕、やれるよ。」と Th に示しながら保育園の建物を工事している人のまねを得意そうに

やる。お料理作りに移ると、Th に「子どもになって。」と言い、「ほくお母さん。」と言って実際の家庭での食生活を再現し、Th が「いつもお母さんがお料理作るの？」とたづねると「うん一生懸命」と言ったり、「お母さん食べないと心配する。」と言ったのは感動的であった。Th が聞く事には明確に答えてゆき、声の出し方も太い発声になって男の子らしくなった。その他、手品の箱をみつけてしばらくどうやってやれるのか考え込んでいるので、Th が「迷ってるのね。」と言うと、「ちがう、考えてるの。」と答え、一段と高い言語的理解力を増したようにも思われた。そして「次何やる？」と遊びのたびに Th にたづねていたものが、今日は「これやる。」とズバリ言って Th を導くというように大きく変化した。保育園生活もプラスに働いたように思われる。今日は先回つけた自信を更に固めて、あらゆる面に進歩を見せ、今後の成長への土台を築き上げたように思われた。

2. 母親とのカウンセリングの経過

I 期—子どもの問題から出発して—第1回（5月2日）～第4回（5月23日）

子どもの身体的状態も一応落ちつき、退院する。母親の様子も明るい。母親は小柄だが、小太りで健康そう、外向的で明るい人という印象である。しかし、しんの強さはもっているし、「何もかも出すまい」とする防衛的なもの、知的に処理してしまう傾向があるのも感じる。舅、姑のことも悪くいうまいと思う気持ちが働いていたようだが、子どもの状態、取り扱い方を話すうちに、次第に養育方針の違いが明らかになってくる。食習慣についてもっともはっきりあらわれており、祖父母は子どもに「もっと食べよ。」としょっちゅういうが、母親自身は小食なので十分と思う。それどころか、自分も「食べなさい。」といわれるのがいやだった。「よけい反抗的になって。」という。単に子どもに対する態度の違いだけではなくて、母親自身が嫁ぎ先での食習慣に異和感、不満をもっていることが明らかになる。自分は何でも食べるし、同じ物を皆で食べるという風に育っている。嫁ぎ先の家族は好ききらいがはげしく、自分が好きな物ばかりをそれぞれ別に食べている。「食物で冒険することがない、味けない、淋しい。」と表現される。特にお産の時、情けない思いをしたことが、母親の気持の中でしこりになっているようである。お産の後、寝ている時に「食べ、食べ。」と持ってこられたが、いかにも食べる気にならなくて、「何てこんなおかず」と思っていた。この話題を聞いて、Co も子どもが「嘔吐」という症状で自己主張をし、周囲の注意をひこうとしたのがいかにもうなずける気がした。子どもが病気という形で警告を発したことで、祖父母が手をひき、母親が責任を取る形になってきている。食事の量、時間についても、祖父母と母親それぞれが別のやり方をしたり、口を出したりして混乱していたのが、母親にまかせられるようになってきた。祖父母は「お母ちゃんに聞いてから。」といい、母親としては「ここまで」とひっこめてもらうことも出来、気が楽になったという。しかし、この傾向も、子どもの状態がよくなって安心するとともに、又、元にもどって、母親のいら立ちが出てくる。周囲のおとなの子どもに対する態度を話すうちに、「自分は子どもに一番年齢が近いので、子ども心が多少残っているような、子どもの気持が分るような気がする。」といい、自分の幼少時のことを回想する。「山や川で自由に遊んで育ってきた。親にあれこれ聞かれることがなかった。」と、子どもの頃の遊びを思い出しながら楽しそうに話す。「子どもにも実家へ帰るとすぐ水に入れてあげたいが、主人は自分がこわいもので危いという。」自分がしてきた経験を子どもにもさせてやりたいと願いながら、夫、舅、姑との考え方の違いで、思うようにいかないのに苛立っている。「近所では心が許せない。」という発言もあり、自分の育ってきた環境と嫁ぎ先との間の異和感を強くもっている。この間、子どもは保育園に元気に通園している。「夜、よく眠るようになり、おしっこも少な

くなった。」など神経質傾向が少なくなっているのが報告される。母親も子どもがたくましく成長してきているのに、眼を見張る思いをしている。

Ⅱ期—自分にも眼を向ける—第5回（6月6日）～第6回（6月13日）

5月30日はかぜのため休み。第5回目来所前に母親から電話がある。「姑からもう行かなくていいんじゃないかといわれる。自分はまだ安心出来ないの由来たい。先生がくるようにとおっしゃれば、そういつて出てきます。」という。しばらく話し合つて、Coは「もう少し続けた方がいい。」と伝える。

入室後すぐ、「深刻になってきました。」と発言、母親がここではっきりと自分の決断で来所するようになり、単なる子どものつきそいから、自分自身の問題を考える場と受けとめてきたとCoは感じる。話題も子どものことを離れ、家族、特に姑と自分（嫁）との関係、その関係を考える中で、自分自身の気持の持ち方、性格が話題になる。今まで働いていた抑制がとれて、Coの方もそれらのことを積極的に話し合つていけると感じとつた。

第5回目には、家族と自分との関係が話題になり、「どこへ行くにも『また、いくの？』といわれる。またいわれると思つてるから負担になってくる。」「うちの人達、何度も同じことをいう、根ほり葉ほり聞きたがる、自分はしちめんどくさいことはきらい、さっぱりといきたい。」「自分の家族（実家）はみんなしゃべらないからこちらに来てびっくりした。」という。やはり嫁ぎ先の家族にとけこめないでいる自分のことが表明される。

姑についての不満は毎日の生活の中でかなりのストレスになっているようで、今までの「物分りのいいお姑さん」のイメージはくずれてくる。「何でもよその人にしゃべる、子どもの悪かったこと（病気）を色んな人が知っている。自分のことも話されているのではと思ふ。悪口でなくてもいやだ。」しかし、話していくうちに「自分がこう思ふから他人も思ふだろうと考えてしまう。」「内向的というか、気が小さいというか、さらつと流せない。」と、自分自身の感じすぎもあるのじゃないかと気づいてくる。

第6回目で更に発展し、自分自身の性格が舅、姑との関係を考える中で問題にされる。「前もつていろんなことを心配する。警戒心が強いとか、気が弱いとか。」そのために、実際にいわれることより、いわれるのじゃないかと思ふことの負担が大きいことに気づいてくる。「いつてしまえばいいが、いえない。他人のことなら何でもいつてあげるが自分のことになるといえない。」とためらいがちに話される。その気持の裏には、結婚してすぐの頃、「在所に帰りたい。」といつて、舅に「駄目」といわれたのがこびりついている。このように、舅や姑との関係は、自分自身の気持の持ち方とも関連していることがはっきりしてくるにつれて、肯定的な感情も表明され始める。「母親としての立場と、嫁としての立場があり、母としての子どものことはいろいろいわれるけど、（嫁としての）自分のことはいわれない。親は子どもをあちこち連れていつてくれて、心底かわいがつてくれている。悪い所ばかり眼についていけない。」一方、子どもの状態は安心出来るようになっている。保育園では、「参観に行くと、他の子と同じようにしていた。」と、特別の問題もなくなつてきている。

Coも明るい見通しが持つてのじゃないかという気持になつてくる。

Ⅲ期—最終回—第7回（7月11日）

発熱、耳下腺炎で3週間休んだ後の面接になる。この間に、子どもは2回吐いたが、午前中で止つた。その時は入院も覚悟していた。「いいわ。」という気持だつたという。この病気をのりこえて、母親は自信をつけ、何とかやつていけると思ふようになる。捨身になつた方がいいという事に気づき、「はれ物にさわるような気持」がなくなつたと思われる。子どもは「熱が

あっても行きたがった」程、保育園に適応し、外にいる時間が長いこともあって、祖父母の干渉をうけなくてすむようになっている。母親は子どもの成長に対して、「いったこと少しずつ吸収してくれてると思う。」と感じている。

母親の方も「3週間の間に精神的に少し変わったように思う。全然こだわりがとれたみたい。話をしてスッキリしたのかもしれない。」と、結婚以来、抑えつけられていた嫁ぎ先の家族に対するこだわりがなくなってくる。

夫の姉達がしょっちゅう来ると、「何となくこだわりがあっていけないと思う。」という話題が出されるが、「大げさなものではなくて、自分の心の中にそういうのがあると思って、駄目だな、いやだなと思うということ。」と話される。Coはそういう気持を問題にするより、むしろ、そういう気持が自分の心の中にあることを素直に認め、表現できるようになった母親の変化を感じた。

母親も「やってみたいと思います。」と表明し、母親としての自信をとりもどすこと、抑圧された感情を解放するというカウンセリングの目標は、一応達成されたと判断し、終結にする。

3. フォロー・アップ 9月12日

11時すぎ、自宅に電話すると母親が出てくる。「いつもは考えないのに、今朝ふと先生のことを思い出して、電話しようかなと思っていた。」と、明るい声の応答に、Coもその同時性に驚き、電話してよかったという気持になる。

子どもは元気に保育園に行っている。帰ってから近所の子とよく遊んで家に居ない。食欲も旺盛。体重も2kg増えて、あごも二重になりそう。実家に連れていったら、母が「前の面影ないね。」といったという。「家族で長野に行ったり、子ども会から海へも連れて行った。おばあちゃんもついていってくれた。海に行くのは子どもは初めて、自分も何年かぶりだった。」と、元気に生活している様子が話される。Coは母親が面接中に、“夫は海へ行くのもきらいで、一度も行ったことがない。山なんかもちろんだめだし。”と話していたのを思い出し、母親のよろこびがいつそう伝わってくる気持がした。

考 察

母親と子どもが、それぞれの面接過程の中で、どのように変化、成長していったかを、両者の相互関連性に留意しながら考察する。

1. 子どもの変化

(1) 母親とのかかわりの中での成長

母親との関係という側面は特に、砂場でのままごと遊びを中心に表現された。ままごと遊びといっても“お料理を作る”というものであり、始めはオモチャの食物を1つずつ取り上げてはおそろおそろ Th に名前を聞いていった。またお鍋やフライパン等の道具類の名前も聞いた。これは自分が食べることでできなかったものへの挑戦と、家庭で母親が使っている物について知りたかったのだろうと思われる。カレーライス、ジュース、ミルクと第2回に名前が本児から飛び出したのは、家庭でいつも与えられている食物だからであろう。それらオモチャの食物をしっかりと握り、口に出すことで、自分の恐怖を取りのぞき、自分の中に取り入れ同化しようとした。この頃母親も、本児が嘔吐で入院した経験から、退院後、食事に対して非常に神経質になっており、こわごわ色々な事を試してみようと努力し始めていた。これが第6回頃に

なると、母親も家庭で一生懸命に、色々なお料理を作るようになり、この事が本児にとって、嬉しくもあり、めずらしくもあったのだろう、遊びの中で母親のまねをして試すことによって、だいじょうぶという自信をつけていき、ごはんに見たてた砂を思い切って自分の口へ持っていき、食べてみるという動作をしたものと思われる。そして最終回にいたり、母親の熱意が本児に通じたのか、遊びの中で、Th に子どもの役割をさせ、自分が母親の役割を取って遊び、Th の「いつもお母さんがお料理作るの?」という問いに対し、「うん一生懸命。」と言ったり、「うんお母さん食べないと心配する。」と言って、母親の気持を受け入れられるようになったのである。こうして母親の変化とともに本児も成長し、母親のみではなく、その他の色々な人や環境にも適応でき受け入れられるようになったものと思われる。

(2) 本児の成長

本児は身体的にも精神的にも不安定な状態から、Th と接することにより、自分の1つ1つの気持を受けとめてもらい、安心感を得て、徐々に力づいてきた身体とあいまって、成長への鍵をつかんでいった。絶えず Th を意識し、決して一人遊びをしなかったのは自分を受け入れてもらいたかったからであろう。第2回にミニ人形の男の子を砂の中に埋めて、「死んじゃえ」と言ったのは、今までの弱い自分を消して、新しい強い自分になりたかった為かもしれない。だんだん活発化してくる動きと、攻撃的に遊ぶピストル場面、カブト虫を砂箱に思い切り投げ付けたり、叩いたり、埋めたりしたのも、自由に気持を表現できたからであると思われる。そうやって今まで心の中にたまっていたもやもやした気持を発散させ、「生きてる。」「負けないぞ。」と絶えず、自分で自分を励ましながら力づけていったように思われる。身体が回復してくるにつれて、あれもこれもやってみようという意欲も現われ、思い切って試してみる勇気を生んだ。この頃通い始めた保育園も、その意味で非常にプラスになり、知識の増大、言語的理解力、いちだんと高い思考力への促進につながったと思われる。そして、最終回に至り、Th に依存、要求していた態度が、Th を導くというリード型にかわり、自分で決定して事を進めていくことができるように成長した。又、母親の気持や、周囲の人々や、その他の環境をも受け入れられるだけの心の余裕を持つことができるようになったのではないかと考える。こうして、母親との相互関係の中での成長と、本児自身の内面からの成長とが、複雑にからみ合って、本児は、この遊戯療法を受ける事により、今後の成長への土台を築き上げたと考えられる。

2. 母親の変化

(1) 心身共に嫁ぐこと

この母親については、パーソナリティの大きな歪みや子どもに対する態度での問題点はそれほど感じられなかった。ただ嫁ぎ先が大家族であり、夫の姉達が近所に住んでいてしょっちゅう出入りしているという状況にあって、いわば敵地に単身で乗りこんできた感じだとけこめないでいたと考えられる。身は夫のもとに嫁いできても心は自分の生い育った実家に残してきており、異和感をもっていた。家族にとけこめない母親の拒否の心を子どもが無意識のうちに自分のうちにとりこんでいたと考えられる。母親が自分でいうように「いとこの店で働いていた頃から抑えるということに対しては、かなり訓練してきたつもり」であり、結婚当初からの母親の気持が巧みに抑えこまれ表面的には適応という形をとって、問題の顕在化を遅らせた。したがって、この抑えこまれた感情の解放を計ることが必要と考えられた。防衛的な気持が強かった母親も、Co との治療的人間関係がついてくるにつれて実家と嫁ぎ先の違いを話すようになる。その違いは、食生活の習慣において最も端的にあらわれている。自分が小食で育

っているため「もっと食べなさい。」といわれると、「よけい反抗的になって。」と自分自身の気持が表現されるが、その気持はそっくり子どもに取り込まれ“嘔吐”となったと考えられる。母親がこの2つの食事の在り方を統合して自分自身のものを作り出していくのが1つの課題と考えられたが、次第に現実的な努力を始めるようになる。オムレツを作ってケチャップをかけて初めて食べさせる。子どもの方もこの母親の努力を認め、“お母さんお料理一生懸命作っている”と喜びをもって受け入れていく。一番基本的なものとしての食事の問題がまず出されたが、続いて子どもの育て方、近所づき合い、家族の性格などが実家と嫁ぎ先ではことごとく違っていることが話題になっていく。次第に自分自身の気持の持ち方とも関連があることに気付いてきて母親の中で統合されていく。つまり、この母親にとっては、舅、姑から色んな事を聞かされたり、干渉されたりすることにより、むしろそうされないかと前もって思ってしまう、その気持の方が苦痛であり負担になっている。「さらっと流さない、いってしまえばいいがいえない」自分の性格のためにこだわりが出来ていると感じるようになる。こういう気つきの中で、家族に対する肯定的な気持も出てきて、母親として子どものことは色々いわれるが、嫁としての自分には何もいわれないと感謝の気持も感じてくる。最終的には「全然こだわりがとれたみたい」と話し、夏休みには家族で遊びに行ったり、姑に海についてきてもらったり、現在の家族にとけこんでいる様子が明らかになる。

(2) “切り離し”への気つき

小此木ら²⁾らもいうように、併行母親面接での焦点は、母親が子どもの問題と自分自身のあり方との関連に気づくことである。本事例ではすでに病院で身体的な問題ではないといわれていた。嘔吐の発作で注射もきかない、点滴するだけという子どもを眼の前にして、何らかの心理的な問題であることを認めざるを得なかったと思われる。しかし、母親は最初、防衛的な態度をとり「特に甘やかもしなかつたし、叱りとばしもしなかつた。下の子が出来てから気をつけて誰かが手をかけるようにしていた。」と、子どもに対する態度に問題はなかつたような、無意識的なレベルでの婚家に対する拒否があることが明らかになる。この間、子どもの状態の改善がみられ、母親の来談意欲の低下がみられたので、Coの方から、母親のこだわりが子どもに影響していることを話し、切り離しに気づくよう働きかける。その後姑から、「もう行かなくていいんじゃないか。」といわれたのをきっかけに、今まで抑えていた姑への不満が表面化し、その自分の気持が子どもに影響を与えていることに気づいてくる。「私自身こんなだから子ども自身迷うと思う。」「自家中毒をくり返したのは私の責任だ。」とはっきり言語化される。ぼんやりと感じていたかもしれないこの気持がはっきり意識化された、その間の母親の気持の変化は「深刻になってきました。」という言葉に端的に現われている。ここに至るまでにはやはりCoへの依存感情が必要であった。来室前に電話で指示を求めてきたのに対してCoはこれをうけいれ、母親の来所の気持を確めた上で、「来た方がよい。」と伝えている。母親はCoのこの言葉を姑に対する武器に使うのである。しかし、面接時間の終りに遊戯室での子どもの状態を話し、遊戯療法の説明をした上で、もう一度母親の気持を確かめると、「いざとなれば私もきつい。あやふやな時が弱い。」と決意を示す。その後は面接場面で少しずつ本当の感情がスタート、子どもの問題だけではなくて、舅、姑との関係も自分自身の気持の持ち方と関連があることを洞察していく。

(3) 母親としての役割の確立

「自由にさせてもらっていた。」とはいいいながら実際には4人の大人が各々、各自勝手に口を出す形で育児が行なわれていた。特に食事については、母親が食べさせた後、また祖父が食

べさせるといのように、時間も量も混乱していた。それに対して母親はいらいらする一方、何もいえないでいたが子どもの病気をきっかけに「ここまで。」と制限出来るようになった。徐々に母親の方に責任が移るようになってくる。食事、就寝、排泄など基本的な躰の面では、寝るまでテレビをつけていたり、夜遅くまで起きているなど、大人の都合で動いていた観があり、母親もどのようにしつけていったらいいのか、とまどい、自信を失っていた。入院についても「病気はいやだったが、病院にいる間に規則正しい生活が出来るようになってよかった」と感じている。まわりに気がねし、主体的にしつけていけなかったのであるが、次第に自分自身で動けるようになってくる。どうしても4人が同じように口を出すので、子どもが保育園に最初に行った日も、「子どもが帰った時、あれこれ聞かないで」と頼んでおいたり、子どものためと色んな料理を作り出すのはその具体的なあらわれと考えられる。姑の意志にさからって来所を決意することで、母親としての自分をはっきり打ち出したと考えられる。その後子どもの変化や成長と相まって、舅、姑の干渉も少なくなり、「やってみたいと思います。」と自信をつけていくようになった。

以上、みてきたように、本事例の場合は、母親には“考える力”“強さ”があったこと、子どもは友人とよく遊び保育園に適応する力があったことなど、両者共、比較的健康度の高いパーソナリティであったこと、さらに母親が語る父親像は「しつけの面で多少甘いところがあったても、子どもの相手によくしてくれる。」夫としても「主人はしゃべらない方、その点では自分とよく合う。」「舅、姑に対して割に口をはさんでくれる。」というように、父・子関係、夫婦関係には問題がなかったことにも支えられて、比較的短期間に母親・子どもそれぞれの成長が得られた。特に両者が相互関連的に変化していくのがみられる。母親の夫の家族へのとけこみがまず必要だったとはいえ、母親の心を自分のものとしていた子どもが、保育園に行き、友人と遊び、いわば母親からの一歩独立がみられる。子どものこの変化が舅、姑の変化をもたらし、それが母親の心を落ちつかせるというように、相補的に一歩前進しているのがみられるのである。母親、子どもの関係そのもの、さらには家族力動に眼を向けていく必要があると思われる。ただ母親面接としては、いわば“母親として”の側面にとどまっている。母親が自分の性格をとり上げ、その抑えてしまう性格がいとこの店で働いていた頃作られたものであるという話題になった時は、母親自身もう一歩踏みこんで自らの問題として探究するかに感じられたが現実的なレベルでの解決にとどまった。あるいはもう一歩踏みこんだ方がよかったのかどうか、Co の中に1つの問題として残されている。どこまで深め進んでいくかを決めるのは、最終的には母親自身であるが、治療者の方もそれぞれの事例によってどこに焦点を合わせ、どこまで進んでいけるかの見通しを持つことが必要になってくるであろう。

お わ り に

児童治療に伴う併行母親面接については“児童のための母親面接”という構えで始められることが多い。母親の気持からすればあくまでも“子どもの問題”を相談するために来談するのである。しかし、治療者の眼からすれば受理面接の際に、すでに母親自身のもつ問題、家族力動の問題、それが子どもの問題をひき起こしていることがみえてしまうことが多い。その結果治療者の構えとしてはどうしても“母親のための母親面接”が目指されてしまうことになる。子どもの問題解決という1つの目標に向けてのスタートラインにおいて、治療者と母親とのこのようなずれが個人治療とは違った困難さをもたらす1つの要因ではないかと考えられ

る。母親は子どもと自分との関連に眼を向け、子どもの治療のためには、自分自身の変化、成長が必要なことを実感していく。“母親のための母親面接への一歩歩みよりが必要であり”逆に治療者の側からすれば“一女性（嫁、妻を含む）”としての問題解決、成長は“母親”としての成長につながっていくように要請される。“児童のための母親面接”という母親の構えを無視してしまう時には、母親の抵抗をひき起し、問題の悪化、中断という危険が待ちうけているといわねばならない。いわば両者がどのように歩み寄り、子どもの問題解決という最終目標に向けて歩いていくかというところに個人面接と違った配慮が必要になってくるのではないかと思う。ここでは、比較的明確な経過を示した一つの事例を提示して考察を加えたが、実際には種々雑多な要因がからみ合い、経過をつかみかねる事例も多い。それぞれの事例を検討して、母親面接の特徴を明らかにし、治療者の在り方を追求していくのは今後の問題である。

参 考 文 献

- (1) 小此木啓吾：石原潔訳 家族の病理と治療（N. W. アッカーマン）pp. 20—49, pp. 211—216 岩崎学術出版社（1970）
- (2) 小此木啓吾他：児童治療における並行母親面接（その1, その2）児童精神医学とその近接領域, 10(3) pp. 160—179（1969）
- (3) 浪花博：問題をもつ子どもの母親のカウンセリングの諸問題, 京都カウンセリングセンター研究紀要 7, pp. 55—69（1974）